

XI. 退官にあたって

目片文夫（器官調節分野）

3月31日をもって定年退官になります。

山口大学医学部での助手生活8年，本研究所での助手，助教授生活32年，合計40年の教官，研究者生活を通して基本的には独りで，則ち，他の人との共同研究を行うことなく，やってきました。基礎研究者は常に孤独あるいは少数派であるべきとの信念を持っています。退官の御挨拶に代えて，基礎研究のあるべき形態の一端を述べたいと思います。

自然科学の分野における研究形態は複数人による共同研究，あるいは各々，個人で行う個別研究，いずれが効果的かに関して，研究の成果としての発見，発明は社会の組織形態さえ変えることが可能なため，これまでも思想家の議論の重要な一部となってきました。彼等の論旨の多くに欠けているのは研究というものをひと括りにして扱う点にあります。研究は応用研究と基礎研究で容態は根本的に，また基礎研究でも一流の研究と二流以下の研究では相当程度に異なります。応用あるいは応用的研究については間違いなく共同作業の方が効果が挙がると思われまふ。裁判における弁護士団の編成や手術での医師団などにみられます。企業の研究所では研究者各人の活動を許さないのも当然でしょう。応用や応用的研究は基礎研究によって確立した成果のうちで実用に益するものを見つけ，それに経験により積み上げられてきた慣習や技術を組み合わせる最終効果にするのです。一方，一流の基礎研究は既知の成果に新たなる何かを付け加える，あるいは既存の概念を打ち砕くかのいずれかです。新たなる概念が多数の人の頭脳の中で共同作業によって作り上げられると考えるのは無理があります。基礎研究の分野での重要な発見は殆ど全て1人で行われたのも当然といえます。一般には，成功は生来の能力，努力，運が必要と言われてまふ。自然科学の場合の成功要件は上記のような特殊作業をこなす必要性のため，生来の能力がその大部分を占め，それに少しばかりの運が絡みます。努力はなんの役にも立ちません。しかし，発見のために研究者は1人部屋に閉じこもり瞑想に耽るべきであると言っているものではありません。他の研究者との接触による刺激や文献からの既知の研究結果をすることも必要なのは当然です。但し，行き過ぎると，ルーチン（定石）はなんでも知っているが研究業績はさっぱりということになってまふ。我々基礎研究者仲間ではルーチンをいかに良く知っていても敬意を払ってもらえまふ。ルーチンは誰でも努力により得られるからです。一流大学の教官が他の職業の従事者よりも特段に世間から敬意を払ってもらえるのは入学者選抜権や学位授与権を保有しているということも否定はできませんが，より本質的な理由は生来の特殊な能力を持っていることにあります。

上述の論旨に対して，不遜，時代錯誤との批難が返ってくることは承知してまふ。批難は相当程度，理があります。実は，このような議論は19世紀から20世紀前半にかけて行われまふ。昨今，誰もこの種の議論をしなくなつたのは大学数，教官数の増加，ならびに，特に近年における，社会の固定化に伴う階層の流動化の停止による教官の質の低下にあります。しかし，一流大学の中での一握りの一流研究者は上述の議論の対象になる能力を発揮してまふ。大学での助手の採用は30歳前後です。其のとき，ではどのように生来の能力を測定できるのかということになります。極

めて少数の優秀な者はこの年齢ですでに結果をだしていますが、多くはそうではありません。生来の能力は事前には当人にさえ判りません。ましてや他人にとってはなおのことです。学歴や知能指数は少しはめやすくなります。しかし、勿論万全からは程遠いものです。理科系のノーベル賞受賞者の学歴をみれば一目瞭然です。知能指数についてはそのテスト問題の作成を担当し、かつテストの成績表を保持し利用することができるのは常に既得権益保有者でるところに問題があります。生来の能力は結果をみるまで判らないことを前提に対処するしかありません。最も深刻な病根は結果を見た後でも適切に対応しないところにあります。最近では東京都立大学、横浜市立大学に見られるように、大学改革の嵐が吹いてきました。日本の大学は相当に組織疲労、制度疲労に陥っています。学部はまだ少しはましなのですが、研究所は相当ひどくなっています。霊長研も例外ではありません。独立法人化はよい機会です。適切な対応を望みます。

私の研究業績を述べて終りとします。Journal of Physiology (1st ranking journal in physiology) 11 編 (single author 9, first author 2), Journal of General Physiology (2nd ranking journal) 2 編 (single author 1, first author 1), Nature 1 編 (first author 1) です。Journal of Physiology での単著者論文数 9 は歴代第 6 位 (コンピュータ検索可能な 1965 年以降しらべ、検索に一部手作業があり少数の見落としの可能性があることをお断りします)、これは私にとって生涯の誇りです。

松林伸子（人類進化モデル研究センター）

1971年11月、当時のサル施設検査室に、転職される栄養士さんの後任として雇って頂きました。検査業務70%、飼育業務30%という業務内容であったように思います。当時は国外（主に東南アジア）から次々アカゲザルやカニクイザル他を直輸入していましたので、雇われたすぐから検便作業ではシゲラ、サルモネラとの戦いの日々でした。検疫風景も、木箱にまとめて数頭入って来たサル達を1部屋に放しておいて、サル達がパニック状態で天井近くを飛び交っている下で1頭ずつ捕まえていた事もありました。

細菌検査業務は、培地もほとんどが半自家製の手作りでガラス製試験管を多用し、仕事の半分以上が洗浄、滅菌作業であった当時でした。

ちょうど新しい2階建ての施設棟に引越しをした頃だったでしょうか？サル達の固形飼料がそれまでのビスケットタイプ（AB）から練り出しタイプの円筒形のもの（MP）に変更され、それから急性胃鼓張症の個体が多く出るようになったような気がします。

30年間程もサル達の所謂「ハラフクレ」と仕方なく付き合いをして来た訳ですが、固形飼料の変更もなされ、現在のASは芽胞菌の胞子も殺菌され、質の良い物になっているはずなのに、未だに年に2頭くらいの発症を見ております。サル類の繊細さ（何らかの原因によって幽門、噴門からのガスの排泄を不可能にする）、飼育での食生活とサル本来の食生活様式との差、そして運動出来ない生活プラス胃内の細菌の作用も原因としてあるのでしょうか。色々調べましたがまだ判っていません。

15周年誌には「黙って採れば（下痢が）ピタリと止まるにならないものかなー・・・」と溜め息混じりに書いたサル達の下痢でしたが、お蔭様で嬉しいことにこちらは、早期発見（飼育担当者の観察によるところが大きい）、飼育環境の変更、脱水と栄養不良状態の改善、検便、そして獣医さんの適切な治療の組み合わせで、現在では完治できるようになりました。ぐったりして入院してきた個体が、治って元気に餌を食べる様子は何よりです。

私事で恐縮に存じますが、2年程前から持病の腰痛が更に悪化し、以前からの難聴も仕事をする上で傍迷惑な事だなど気になっておりました。昨年夏に所長さんが「独法化後は教務職がもし辞めたら、技官が採れる」と所内にメールでお知らせ下さいましたので、「それでは辞めて若い人に交代して貰える！」と急でしたが決めさせて頂きました。

ベテラン揃いの技官、飼育パートさん達、そして若い技官の方々の意欲的でパワフルでよく働く事！センターもこれから益々大変かもしれないけれど、あのメンバーならサル達の健康管理は安心してお任せ出来るなーという感想です。よろしくお祈りします。

細菌検査作業につきましては、これまで多種のキットの使用件数の少なさの為、無駄の出ることがとても気になっておりました。そんな折、ちょうど良い外注先が見つかり、親身な対応の上、請求金額も高くないことが判りましたので、是非この機会に外注化を実現し、その分の貴重な労力を飼育や治療に向けて頂けたらいいなと願っております。